

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリアそろばんの旅⑭ 最終話

イタリア語を勉強しないでください?!

木下 和真

ついに最後の授業日がやって来た。さすがにこの日はコラードさんも一緒だ。学校に着くと担任の先生がいつものように今日の内容を教えてくれる。ひと月イタリアにいて、大まかな内容は分かるようになってきたが、完全理解までは程遠い。最後だけあって今日の内容はいつになく盛りだくさんのようだ。

すかさずコラードさんが私に聞いてくれる。「分かりましたか？」
「学校新聞が何とかって……」
わたしは何とか理解できた部分を答える。「そうです。今日は、半分授業をして残りの半分は子供たちがあなたに質問をします。」

学校新聞にそろばん授業の記事を載せるという話は、以前にも聞いていた。だが、先生たちが授業の感想や様子などを載せる程度を予想しただけで、子どもたちが自ら記者になって直接私に質問をするとは夢にも思っていなかった。

もちろん子どもたちはイタリア語で私に質問をする。子どもたちは、私が外国人だからと言ってゆっくり話してくれることなどまるでない。イタリア人の先生と話すとときと同じくらいのスピードで話しかけてくる。おとなと違って滑舌もはっきりしないので、今までまるで理解できていなかったのだ。

「もしかして、今日が最大の試練かも……」
と私はコラードさんに言う。
「だから、わたしがいます」
コラードさんは答える。なんとありがたいお言葉。「お願いします」

最後まで、コラードさんに頼りきりだ。

質問の時間が始まると、子どもたちは容赦ないイタリア語で疑問をぶつけてくる。

「そろばんはいつ発明されましたか？」

「先生のように上手くなるのにはどれくらいかかりますか？」

「日本の子どもたちは学校でそろばんを習いますか？」

質問自体はそれほど特殊ではなく何とか理解できた。しかし、聞かれた以上、答えなければならない。リスニングの後にはスピーキングとてんこ盛りだ。

担任の先生の手伝いもあり、悪戦苦闘しながらも何とか答えていると、もう大丈夫と思ったのだろうか？ コラードさんはずっと教室を出て行った。一瞬不安になるが、返答に精一杯。横目でやり過ごす。



【授業風景】

何とか一つ目のクラスが終わり、次のクラスに移動する。その廊下で、コラードさんの口が動いた。

「私は授業がありますので大学に向かいます。」

私は絶句する。どうしよう。もうコラードさんの助けはない。

呆然とする私に、コラードさんはすかさず一枚の紙を差し出した。

「次のクラスの質問内容です」

その紙にはイタリア語で五つの質問が書かれていた。コラードさんは先回りして、次のクラスの担任の先生から質問内容を聞いておいてくれたのだ。

何とぬかりない。そして、

「分かりますか？」

と、聞いた。

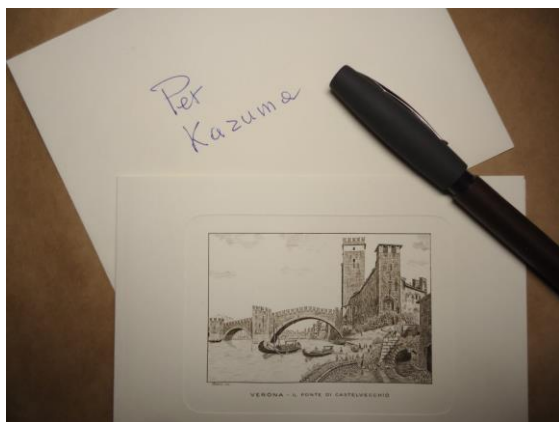
私はさっと用紙に目を通す。分からない単語を指差すと、コラードさんはすぐに日本語訳を付けてくれる。

「あとはがんばってください」

そう言い残し、コラードさんは去って行った。

なんとか最後の授業を終えると、生徒全員の名前が書かれたメッセージカードを受け取り、別れの挨拶を交わした。最後に挨拶をしたエリザベッタ教科主任からは、このようなことを言われた。

「あなたはイタリア語で授業をした。それがすべてを成功に導きました」



【記念のメッセージカードとボールペン】

その日の夕食は、ヴェローナ最後の晩餐だった。

「また、ヴェローナに来ることはあるのだろうか？」

ずっと考えていたことをつぶやくように口に出した。

「あなたが日本へ帰ったら、二週間以内にイタリアでの活動について論文を書いてください。私はその論文をエリザベッタを通して、上に報告します」

「はい」

と私は答える。コラードさんは続ける。

「そして、待ってみます。本当にそろばんがしたい子供があらわれるのを待ちます。本当の興味を持つ子どもが現れたら、一週間に一回、私がその子供たちにそろばんを教えます。けれど、本当の興味が必要です。本当の興味があれば、お金は必要ありません。本当の興味があれば自ら学ぶはずですよ」

もし本当の興味を抱く子どもが現れなかったら、来年同じ授業をしたところで今年の繰り返しになるだけ。同じことをしても、また忘れるだけならば何の意味もないというのがコラードさんの意見だった。

この一か月を意味のあるものにするために私にできることはなんだろうか？

「日本に帰ったらイタリア語をもっと話せるようにならないと・・・」

あまり深く考えず、私は思ったことを言葉にした。

頑張ってください。単純にそんな返事を期待していたのだが、直後にコラードさんの口から出た言葉は意外なものだった。

「日本に帰ってからは、イタリア語を勉強しないでください」

「……」

全く理解できずにいる私をよそにコラードさんは続けた。

「あなたはイタリア語を勉強しにイタリアに来たのではない。あなたはそろばんの人です。」

あなたはイタリア語を勉強しにイタリアに来たのではない。

衝撃的な言葉だった。そして、次は現実的な言葉が続いた。

「すべてがうまくいってまた同じことができるようになれば招待状を送ります。4月の終わりまででし

たね。そしてイタリアに来ることが決まったらイタリア語を勉強してください。」

エリザベッタ教科主任からはイタリア語で授業をしたことが最も大切だと言われ、コラードさんからはイタリア語を勉強しないでくださいと言われた。相矛盾する二つの言葉だが、その中に真理が隠されているように思える。

外国で何か活動をするとき最も大切なことはなんだろうか？

もちろん言語がある。そして、忘れてはならないのが専門だ。コラードさんの言うように専門がないと始まらない。

「あなたはそろばんの人です」という言葉は、すなわち専門を磨きなさいということになる。

しかし、専門だけでは外国での活動はうまくいかない。そこで言語が大切になる。その国の言語を話すことで、その国の人たちとの距離をぐっと縮めることができるのだ。「専門と語学」この二つはまさに車の両輪と言えるだろう。

最後に私は、「そろばんを習うことは、広い意味で言語を学ぶことだ」と考えている。極端に言うとそろばんも言語の一種であるともいえる。

例えばコップが三つあるとする。その数を表すのに日本人は日本語で「さん」と表現する。イタリア語なら「tre」、英語なら「three」。各言語が様々な表現を持っている。

文字としての表し方もいろいろだ。算用数字(アラビア数字)では「3」だが、漢数字なら「三」。ローマ数字は「Ⅲ」で、タイ文字では「๓」と表す。

概念としての「3」が存在し、それを表すための表音方法も表記方法も言語によって異なる。そろばんを使い珠で「3」を表すのも、そのうちの一つに過ぎない。珠と桁で数を記号化し、その操作を習うのが「そろばん」だ。ならば、そろばんを習うことは「そろばんの世界の、珠を使った言葉を操ること」ともいえるだろう。

ある日のことだが、私はこのような泣き言を言ったことがある。日本イタリア会館でマルコ先生のプライベートレッスンを受けていたときだった。

「男性名詞、女性名詞、複数形…… il, la, le……きちんと言うなんて無理!!!」

すると、マルコ先生はこう言った。

「そろばんと同じです。何度も練習をしていると自然にできるようになります」

幼いころからそろばんに触れている私の指は何も考えずとも自然に動く。反対に私の口からイタリア語は自然には出てこない。

けれど、そろばんを始めてかれこれ25年が経っている。イタリア語を始めてどのくらい経つだろう。

そうだ。私のイタリア語の旅は始まったばかりなのだ。今までそろばんの道を歩いてきたように、一步一步歩いていくしか道はないのだろう。

2014年の秋には三度目の「イタリアそろばんの旅」が待っている。それまでにイタリア語を磨き、更なる専門の力を蓄えるべく一步を踏み出すことにしよう。

イタリアで出会った人々と再会できるその日の為に。



【イタリア・ヴェローナの空】

二年余り続けてきました「イタリアそろばんの旅」も今回で完結です。読者及び関係者の皆様から心から御礼申し上げます。

(木下 和真・当館語学受講生)

イタリア通信

第16回『文化遺産とイタリア人 —Cultura を今こそ—』

深草 真由子

イタリアは文化大国だと言われることがある。文化の豊かさとは、言うまでもなく旅行者を魅了する見どころの数の多さのことではない。偉大な芸術家や詩人、音楽家、建築家、デザイナーらの作品だけが、この国の文化を豊かにするのでもない。そもそも文化とは何だろう、何のためにあるのだろうか。Cultura… Coltivare…。土を耕し、種をまき、水をやりながら作物の成長を見守る。大きく育ちますようにという願いをこめてする、そうした一連の作業が Cultura という言葉の由来なら、Cultura とは何か新しいものを生み出すためのプロセス、未来志向の活動であるはずだ。実りだけを見て Cultura は語れない。さまざまな分野で「土を耕し、種をまく」人々、社会と主体的にかかわる市民たちがイタリアの Cultura を支えているのだろう。

さて、イタリアは風景と歴史的・芸術的遺産の保護を憲法で保障している世界でも珍しい国である。なぜそこまでして保護する必要があるのだろうか？それは単に美しいから、歴史的・芸術的価値が高いからという理由ではなく、遺産はすべてのイタリア人に平等に人間的成長のきっかけを提供する素材の一つだからである。自然と共にある人間の営みの場としての村落や、コミュニケーションの場として機能する教会や広場を抱える都市の風景は、現在を生きるイタリア人の精神生活を豊かにし、未来への展望を拓くものだからこそ、大切にされなければならないのだ。

だが資本主義的価値観が幅を利かせば利かすほど、Cultura は逆境に立たされる。商品と化する文化遺産、そしてその消費者となる私たち…。芸術都市フィレンツェをめぐる最近議論になったいくつかの出来事を紹介したい。

「サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラは、これまでに建設されたものの中でもっと

も大きい」。イタリア食材を専門に販売するチェーンストアのフィレンツェ店の壁に、こんな文章が書かれている。厳しい経済危機の中、各地に店舗を開いて多くの若者を雇用し、業績を伸ばしているということで期待を集めている“メイド・イン・イタリア”ブランドの企業である。フィレンツェの中心、大聖堂のすぐ近くに位置するこの店には、大量の商品とともにフィレンツェ・ルネサンスを代表する絵画や彫刻作品の写真が展示されている。上で引用したのはそのキャプションの一部である。オーディオガイドの貸し出しサービスまでであるという。買い物客はショッピングをしながら美術鑑賞(?)も楽しむことができる。それがこの店の売りなのだ。



【サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂】

「アカデミア美術館もバルジェット美術館もすぐそばにあるのに、なぜここで？」という疑問には触れないでおくとして…。それにしても「これまでに建設されたものの中でもっとも大きい」というキャプションはかなり大雑把なものと言えるだろう。ブルネッレスキのクーポラは、建設当時は世界最大のものであり、石造りのクーポラとしては現在でも世界最大であるというのが正しい。店のホームページを見てみると、やはりここでも「私たちが

ルネサンスを紹介します」とあり、その「紹介」の内容とは「重要な人物としては他に挙げられるのは、もっとも偉大な政治思想家で、市民兵の擁護者ニコロ・マキャヴェッリ。ピーコ・デッラ・ミランドラと人間の自由意志の思想。ピエロ・ディ・コジモ。反体制派の説教師、教会に破門されたジローラモ・サヴォナローラ。貴婦人カトリーヌ・ド・メディシスとフォークの発明。そして 1492 年のクリストファー・コロンブスによるアメリカ大陸の大発見に至る」といった具合である。そもそも史実の理解があまりないうへ、使い古されたキャッチフレーズを並べて「私たちがルネサンスを紹介します」というのは少々大げさではないか。スーパーマーケットと美術史のコラボレーションは発想としては悪くないのかもしれないが、問題はその方法であろう。美術史の知識が乱用されてはいないか。美術作品がマーケティングの道具にされてはいないか。

最近フィレンツェでは公共の文化遺産を、私的な使用を目的とする個人に貸し出す試みがすすめられている。お金さえ払えば(庶民には到底無理な金額だが)、ウツフィツィ美術館を独り占めにしてお見学したり、ポーポリ庭園やヴェッキオ橋を借り切ってパーティを開いたりすることもできる。私有化が少しずつ進んでいるのだ。現在フィレンツェ大学建築学部として使われているサン・クレメンテ館は、売却する計画が着々と進められている。高級ホテルにでもなるのかもしれない。これも止められない時代の流れなのだろうか。

文化振興の目的で企画される大きな催しものが本当に文化的かどうかは問われてしかるべきだろう。フィレンツェでは一週間ほどの文化イベントのために、何トンもの大理石の巨大オブジェでサンタ・クローチェ広場が飾られたり、樹齢数百年の立派なオリーブの樹七十本が、鉢植えにされてサン・ジョヴァンニ広場に並べられたりすることがあった。大量の石や樹々を自然環境から切り離す行為に、人間の傲慢さがありはしないか。そしてそれは Cultura の本質と矛盾しないだろうか。

レオナルド・ダ・ヴィンチの幻の壁画『アンギアーリの戦い』探しにも触れておきたい。1504 年レオナルドはヴェッキオ宮の大会議室の壁に、ローマ時代の手法を実験的に試みて『アンギアーリの戦

い』を描き始めた。だが絵の具が流れ落ちるトラブルを解決できず、未完のままを作品をあきらめることになった。その半世紀後、コジモ一世の依頼でジョルジョ・ヴァザーリが大会議室を五百人大広間として改修した。現在の広間にレオナルドの仕事の跡は見るできない。彼の未完の壁画は、改修の時点ですでに失われていた可能性が高い。あるいは残されていたのだとしても、ヴァザーリがどう処理したのかは明らかでない。



【フィレンツェの市庁舎ヴェッキオ宮】

ところが 2007 年、五百人大広間の東側にあるヴァザーリのフレスコ画『マルチャーノ・デッラ・キアーナの戦い』の後ろの壁が二重になっていることが判明した。そして「そこにレオナルドが隠されているにちがいない！」という話になり、さっそく調査チームが組まれた。「ヴァザーリよりレオナルドが好き」と公言したフィレンツェ市長は、メディアを巧みに利用しながらこの一大文化プロジェクトを盛り上げた。そしてヴァザーリの作品に穴を穿ち、内視鏡を入れて二重壁の間を調べることになったのだ。

ヴァザーリのフレスコ画の運命を心配した美術史家らは反対声明を出した。レオナルドの壁画が改修当時まだ残っていて、ヴァザーリがそれを壁

の後ろに隠したという説は明確な根拠に欠けているし、そもそもレオナルドが壁画を制作した場所は、ヴァザーリの作品のある場所とは反対側、つまり広間の西側の壁であったというのがもっとも信憑性の高い学説だという。なぜ専門家たちの声を無視して、ヴァザーリを傷つけるに至ってしまったのだろう。

確かに、レオナルドの謎を追うプロジェクトには夢とロマンがある。「レオナルドの最後の秘密」といった文句で大々的に宣伝すれば、世界中から多くの観光客を集めることができるだろう。ついでに文化振興に前向きな政治家というイメージも広めれば、市長の支持率を伸ばすこともできるかもしれない。だが芸術は興奮と感動を与えるための見世物ではないし、市民はその観客ではない。時間がかかっても堅実な方法で、文化を理解し愛する心を育むことが、今こんな時代だからこそ大切なのではないか。市民が“市民”でいられるために。



【レオナルド・ダ・ヴィンチによる
『アンギアーリの戦い』のためのスケッチ】

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>

～イタリアンレストラン紹介 西大橋～
Pizzicheria & Standing BAR

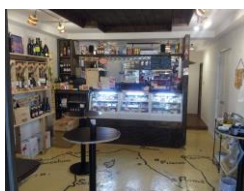
Pink flamingo (ピンクフラミンゴ)

生ハム・サラミ・チーズなどが買えるデリカテッセンと、店内でそれらを食べながら飲み物はワインを中心としたスタンディングバル。現地さながらに、お持ち帰りはその時にスライスしての量り売り、バルはキャッシュオンスタイルです。

特典: (日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
エスプレッソサービス

住所: 大阪市西区新町 2-16-2 阪田ビル 1 階
電話・FAX: 06-6536-2839

HP: <https://www.facebook.com/ppinkflamingo>



～イタリア文化セミナーご案内～
フルコースランチ付セミナー

遠くて近い太陽の国イタリア その意外な横顔

遠くて近い太陽の国、イタリアの国・ヒト・社会について、日本との関わりにも触れながら、私たちのあまり知らない意外な横顔をご紹介します。

<大阪> 日時: 3月9日(日) 12:00～14:30

場所: ピエトラサンタ

(大阪市中央区心斎橋筋 1-3-29 ミヤプラザ心斎橋 B1F)

<京都> 日時: 3月21日(金・祝) 12:30～15:30

場所: La Cucina 古谷 (京都市左京区吉田中阿達町 24-5 1F)

参加費: (大阪・京都共通) 会員 4,500円 受講生・一般 5,500円
(食事代、ワイン代(赤白各一杯)込み)

大塚国際美術館名画鑑賞ツアー ミケランジェロに出会う旅

高級リゾートホテルで壮大な渦潮を観ながら豪華なランチをご賞味いただいた後、大塚国際美術館の超人気元学芸室長がルネサンスの名画の世界を紹介します。

日時: 4月20日(日) 8時～20時

行き先: 大塚国際美術館(徳島県鳴門市)

参加費: 会員 18,000円 受講生・一般 19,000円

(バスチャーター費、美術館入館料、昼食代、旅行保険を含む)

* 詳細は事務局までお問合せ下さい *